



この秋号は「探求」がテーマである。生まれて間もない赤ん坊は寄る辺なきの中で手足を動かし温もりを求め、その中に身を埋める。やがて身の周りの世界に向かって手を伸ばし、口に含んだりたいたたりする。六か月頃には、自身自身の足の指をくわえたり手にじっと見入ったりする自己刺激的運動も盛んになり、「これは何?」「どんなもの?」「なんでそうなるの?」と、世界と自己の関係を探る。What?とHow?とWhy?の不可分の世界。「求」を「究」とする「探究」の語もあるが、幼い子どもの姿を観察すると、身体的可視的な「求め」と精神活動としての「究め」が未分化に始まっていることがわかる。

子どもが何かに向かって探求する行為は、大人のそれに比べて動きを伴うことが特徴で(加用氏)、結果的に汚れたり散らかったり壊したりが普通。道理で子どもの探求的行動は大人に抑止されやすくなる。「探求」を直接的にじかに知的発達へと結び付けたい昨今の大人はそこに軋轢あつれきを感じ、コンパクトで片付けやすい、汚れない、失敗が少ない調理セットや実験おもちゃのような商品を探めがちだ。北野氏は、大人の都合ではなく子ども側のペースでの探求を保障しようとする教育方法の系譜について論じてくださった。自然科学者の菅本氏は、探求したいものは向こうから迫ってくると言う。日常生活の中で十分遊ぶことが探求対象を見いだしやすい体をつくる、というふうにも読めた。遠足でライオンを見た子どもが「ライオンになる」子どもの話(木下氏)。それを面白がって援助する保育者のいる環境が、探求心の苗床になっているようだ。(浜口)